



なごみ

さふらん

十月も末になると
 吉田から鴨田に向かう街道沿いは うす紫に染まる
 昼間集めたサフランの花は
 夕ごはんの後 家族みんなが堀コタツを囲み
 夜なべでめしべを摘んでいく
 山のような花びらを見れば これだけ? という感じで
 黒い盆に 深い紅が糸のように重なってある
 翌日朝もやの中 花びらは田畑に捨てられていく
 美しい初冬の風景も 安ければいいという外国産に
 追われながら だんだんと減っていく
 つい最近まで 一つの文化を創っていた
 仕事と生活も壊れていく

せんでい
剪定ばさみ (庭師のワンポイントアドバイス)

「**落葉広葉樹**」

～ カシワ、クヌギは何故枯れ葉がいつまでも付いているか～

紅葉については、以前**和No.6**でも紹介しました。
 夏、緑色だった葉は、気温の急激な変化によって葉中の物質(糖、アミノ酸など)が化学反応を起こし、紅色(モミジ、ナナカマド)や黄色(イチョウ、ケヤキ)、褐色(クヌギ、カシワ)に変色します。
 一本の木なのに違う葉の色になるのは、葉の位置により気温や、湿度、日照などが違って来るからです。
 葉が褐色になる樹は、冬でも枯れ葉を付けたままです。それは、葉を落とすための“離層”(葉柄と枝の境に出来る特殊な組織)が発達していないからです。
 それと、カシに近い樹種なので常緑樹の性質が残っており、葉を落とす事が上手くないのではないかと考えられています。



ご報告

「第4回川野組研修会」が9月13日(火)午後6時より竹田文化会館大会議室で開かれました。この会は当初、同月6日の開催予定でしたが、台風のため1週間遅れで開かれたものです。集まった関連会社30数社の現場責任者達は、お客様に満足して頂けるための現場での取り組み方や、スムーズに作業をするための関連会社の連携について、仕事の疲れも見せず真剣に話し合いました。この研修の成果は、きっと現場で活かされる事でしょう。



川野組 ING (現在進行形)



Y邸 (竹田)

先般、竣工しました母屋同様、竹田の景観に配慮したデザインです。完成をお楽しみに。

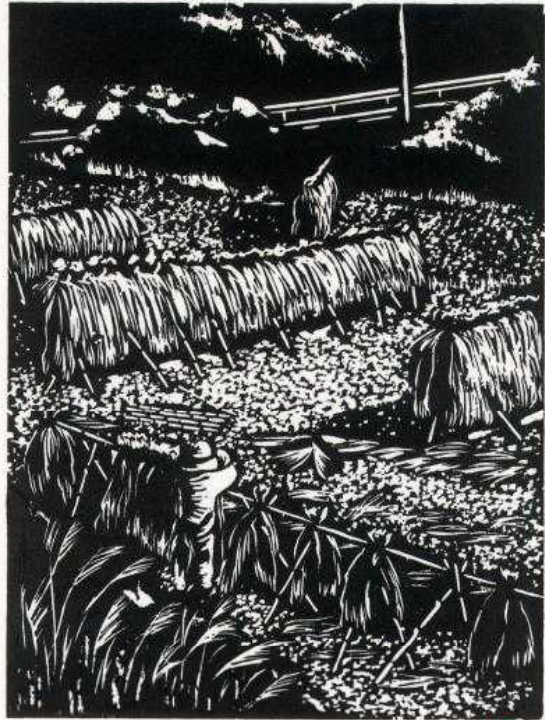
『和』を読んでの感想をお聞かせ下さい。

発行人 川野和男
 編集 川野組内
 家造り匠の会
 ☎ 竹田62-2416
 メール tkk22@theia.ocn.ne.jp

旬の版画

真っ青な空の下
もくもくと“掛け稲”に精を出す
お百姓さんに目が留まりました

五穀豊穰の秋です



「陽のめぐみ」

© Kawano

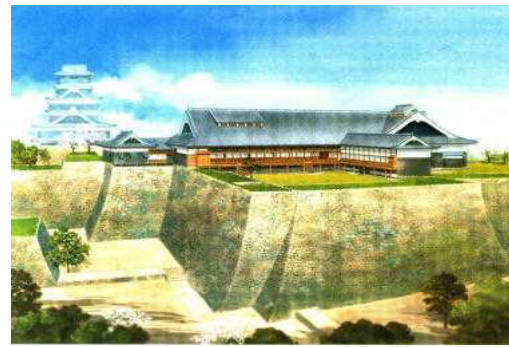


隔年開催がほぼ定着した感のある『家造り匠の会 研修旅行』。

「どこでも良いんよ。でもな、俺は2時間以上は車には乗らんから。」といつもの様に駄々をこねる御意見番に苦しめられてきた事務局に天の助け。信じられない様な物件が近場に転がっていた。それが『熊本城本丸御殿大広間復元整備工事』であった。

文化財の修復を幾つも手がけてきた我が会の棟頭に聞いてみると渡りに船、西光寺の鐘楼や塩屋さんを修復したときにご指導頂いた(財)文化財建造物保存技術協会の東坂氏が関わっているという。

早速連絡を取り打診をすると、快く見学を引き受けてくれた。



10月1日、参加した11名の会員は、2台のワゴン車に分乗して目的地へと向かった。現地でも出迎えてくれたのは、熊本城総合事務所の青木所長。

まず案内されたのは、駐車場横にある資材置き場と加工場。壁に使う土は、藁と混ぜられ仮設プールに沈められている。

加工場には、大寸の松や檜の木材がごろごろしていた。目の前にも大黒柱のような檜の角材が横たわっていた。

「これは、何に使うんですか？」

「ああ、それは台所の上框です。」

「こっ、これが台所の！はは・・・」笑うしかない。

ここで冊子を見ながら青木所長の概要説明をうける。

「今回の工事は、西南戦争直前の明治10年に焼失した本丸御殿の復元整備です。天守閣が、象徴であるのに対して本丸御殿は行政の中心的な建物であり、その座敷飾りなどの絢爛さで大名が家臣に対して威厳を示す場であったわけです。復元に際しては、現存する障壁画や江戸時代のおかかえ絵師のスケッチ、明治時代に撮った写真、残された城の平面絵図、同時代の家臣の建物や京都の二条城、名古屋城の御殿などから寸法を割り出しました。

では現場へ行ってみましょうか。」

天守閣の南側、“武者返し”と言われる城壁の上に、スッポリと現場を覆うように巨大な鉄骨の仮屋根がそびえ建っている。

普段は工事関係者以外は立ち入り禁止の場所だけにワクワクしながら入ったのだが、果たしてその期待が裏切られる事はなかった。



滅多にお目に掛かれない高価な檜や檜が桁や柱に、どこに立っていたのか真っ直ぐな栗の木が大引にと、惜しげもなく使われている。壁には土壁の下地となる小舞竹がピッシリと組み上げられ、整然とした美しさは美術作品を想わせる。

呆気に取られ見まわしているうちにふと、いつもの建築現場と何か違うのに気が付いた。そう、音だ、「ギョルルルッ」や「シュタタッ」という電動工具の音が殆どしない。「とんとん」「かんかん」といった手作業の音が上階から降り注ぐ。それが何とも耳に心地良い。

説明を受けながら一行は足場を上へ上へと移動して行った。

屋根全体が見渡せる高さまで登ると、屋根職人が、薄い杉の板を重ね張りしていく“とんとん葺き”(今のルーフィングです)という作業をしていた。まだ若い。

「職人さんは遠くから来られてるんですか？」と青木さんに聞いてみる。

「瓦は福岡ですが、大工や、左官、石工は自前です。皆さん文化財専門にやってきた人達です。若い人もいますが、こんな現場で経験を積ませておけば良い勉強になるでしょう。」と答えが返ってきた。

文化財の復元をしながら同時に次代の職人を育てる。

これならいくらお金が掛かっても惜しくはあるまい。

いくら掛かっても・・・！そうだ！

肝心な事を聞くのを忘れていた。

「あの～、それで予算はいくらぐらいなんですか・・・？」

「ああ予算ですか、建物だけで45億です。坪400万ですから城としては、まあ安い方ですよ。わっはっは！」

「・・・はは・・・ははは・・・」

もう、何が何だか・・・。

